

阿南 ぷらりまち紀行

ふるさと「阿南市」のすばらしい魅力を再発見!

～地域の輝き～

第105回

梅星座
(長生町)



着物姿で田んぼを駆ける村娘、眼光鋭い金貸しの男性、すべてを見通しほほ笑む仙人…次々と劇に登場する表情豊かな人形たちが、観客を物語の中に誘い込んでいく。人形たちを操っているのは「梅星座」の皆さん。長生公民館に週に一度集まり、人形作りや創作劇の練習に取り組んでいる。

3年ほど前、公民館の人形作り講座の受講者で結成し、地元が誇る梅の名所、明谷梅林にちなんで名付けた。人形の素材は発泡スチロールや紙粘土など。胴体や腕などのパーツを組み合わせ、絵の具で色を塗り、衣装を着せる。指の節々など細部にまでこだわった30体の人形は、どれも自信作ばかりだ。

劇の演目は「赤ずきんちゃん」や「ながいけの泥かぶら」など3本。はやりの言葉や歌を交じえ、原作とはひと味違う独自の物語に仕上げている。小道具もすべて手作り。観客の年齢層や上演場所によってアレンジを加え、「見る人に楽しんでもらう」ための準備を惜しまない。



練習を休んだことがないという栗本豊子さん(85歳)は、「みんなで集まって練習するのが楽しいんです。人形の複雑な動きを覚えるのは根気がいりますが、お客さんの喜んだ顔を見ると、まるで自分が本当の役者になった気分になります。発表する機会をいただけるのは本当にありがたいことです」と話す。

上演回数を重ねることで評判も広がり、今では老人保健施設や保育所など市内外から出演依頼が相次いでいる。地域の有志から劇の背景に使うパネルを提供していただくという後押しも受け、今後の活動にますます熱が入りそうだ。

人形作りも劇作りも「何でもあり」が梅星座流。自由な発想から生まれた人形たちは、髪の毛の色ひとつとっても作者の思いがにじみ出る。手作りの温もりが感じられるからこそ、観客は梅星座の物語に共感するのだろう。次の新作はどんな作品に出来るのか：続きは劇を見てのお楽しみ。